

# 病害虫発生予察情報(2月予報)

令和4年1月26日

静岡県病害虫防除所長

## 1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (2月の県平均平年値)	予報の根拠
トマト	灰色かび病	発生量：並 (発病株率6.0%)	1月中旬発生量：少 (－) 病害虫防除員からの報告：多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：多 (発病株率6.2%)	1月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 (発病株率2.7%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率3.9%)	1月中旬発生量 黄化葉巻病：少 (－) コナジラミ類：多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
たまねぎ	腐敗病	発生量：少 (発病株率1.6%)	1月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	灰色腐敗病	発生量：並 (発病株率0.0%)	1月中旬発生量：並(発生なし) (±) 気象予報：降水量：ほぼ平年並 (±)
	ネギアザミウマ	発生量：多 (寄生株率34.1%)	1月中旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
レタス (非結球 レタスを除く)	べと病	発生量：並 (発病株率1.2%)	1月中旬発生量：少(発生なし) (－) 病害虫防除員からの報告：やや多 (＋) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	斑点細菌病	発生量：少 (発病株率2.2%)	1月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
いちご	灰色かび病	発生量：並 (発病株率1.2%)	1月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±) 降水量：ほぼ平年並 (±)
	うどんこ病	発生量：少 (発病株率1.0%)	1月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	炭疽病	発生量：並 (発病株率0.9%)	1月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	アブラムシ類	発生量：並 (寄生株率1.4%)	1月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	ハダニ類	発生量：やや少 (寄生株率13.4%)	1月中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)
	アザミウマ類	発生量：並 (寄生株率4.7%)	1月中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：ほぼ平年並 (±)

#### 表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は  
こちらで  
検索！



静岡県農薬安全使用指針  
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

## 2 予報の根拠と防除対策

### 【トマト】

#### <生育の概況>

生育は平年並である。

#### ●灰色かび病

##### 予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.4%（平年4.2%）と平年より少なかった。ただし、病害虫防除員からは一部地域で多く発生しているという報告があった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しないが、例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

##### 防除対策

- ・ 朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。
- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

#### ●葉かび病・すすかび病

##### 予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率は20.8%（平年10.6%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しないが、例年12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加するため注意する（生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

##### 防除対策

- ・ 葉かび病については、葉かび病抵抗性品種（*Cf-9*）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。本県では12月以降は葉かび病の発生が増加する傾向があるため、葉かび病抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、葉かび病の発生に注意する。
- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。

## ●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

### 予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病は平均発病株率 0.6%（平年 3.1%）と平年より少なかった。
- ・ コナジラミ類は、平均寄生株率 15.4%（平年 6.0%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並であるため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を特には助長しない。このため、本病の発生も特には助長されない。

### 防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、適切に処分する。
- ・ 脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・ タバココナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板での捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させるとともに、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

## 【タマネギ】

### <生育の概況>

生育はほぼ平年並で推移している。

## ●腐敗病

### 予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率 0.6%（平年 3.0%）と平年より少なかった。
- ・ 本病は、凍霜害や強風雨、ネギアザミウマの食害等による傷口部から感染しやすく、気温が高いと感染・発病が助長されるが、1か月予報では、気温はほぼ平年並、降水量はほぼ平年並のため、特には助長しない。

### 防除対策

- ・ 傷んだ葉がある場合は、降雨の直前に予防散布を行う。また、ネギアザミウマの発生に注意し、本虫の防除を実施する。

## ●灰色腐敗病

### 予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、鱗茎に発生は認められなかった（平年発生なし）。本病は鱗茎だけでなく、葉にも斑点状の症状（ボトリチス葉枯症）が現れることがあるが、ボトリチス葉枯症の平均発病株率は0.2%（平年1.0%）と平年より少なかった。
- ・本病は多雨で発生が助長されるが、1か月予報では降水量はほぼ平年並のため、特には助長しない。

### 防除対策

- ・降雨が続く場合は、薬剤散布により防除する。
- ・被害株やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

## ●ネギアザミウマ

### 予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均寄生株率40.8%（平年28.9%）と平年より多かった。被害程度を示す被害度は、14.5（平年15.5）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、発生は特には助長されない。

### 防除対策

- ・平均寄生株率が高いことから、収穫が2月中旬以降で、本種の発生が確認されたほ場では、早めに防除を実施する。成幼虫ともに葉と葉の隙間に多く寄生しているため、寄生部位に薬剤が十分かかるように丁寧に散布する。

## 【レタス（非結球レタスを除く）】

### <生育の概況>

生育は平年並～遅く、地域によってばらつきがある。

## ●べと病

### 予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率1.6%）。ただし、病害虫防除員からは一部ほ場でやや多く発生しているという報告があった。
- ・1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しない（病原菌の生育適温は10～15℃で、多湿を好む）。

### 防除対策

- ・本病原菌は空気伝染するため、近隣のほ場で発生が確認されている場合は薬剤の予防散布を行う。
- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・トンネル内が高温多湿にならないよう換気に努める。

## ●斑点細菌病

### 予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 2.3%）。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並であるため、本病の発生を特には助長しないが、トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなるため注意する。
- ・ 凍霜害は茎葉を傷めて病原細菌の感染を助長させるため、発生に注意する。

### 防除対策

- ・ 発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げるのが大切である。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル内が高湿多湿にならないよう換気に努める。

### <その他の病害虫>

## ●ビッグベイン病

- ・ 1月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 2.1%）。
- ・ 本病は土壌中に生息する菌によって媒介される土壌伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。また、発病株は根ごと取り除き、土壌中のウイルス保毒菌量を少なくするように心がける。
- ・ 例年、志太地区で発生が多いため、当該地域では特に発生に注意する。

## 【イチゴ】

### <生育の概況>

生育は地域によってばらついており、平年より早い～遅いまでそれぞれである。

## ●灰色かび病

### 予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 0.3%（平年 0.6%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない。

### 防除対策

- ・ 本病は気温が 20℃前後、多湿条件下で多発生する。そのため、施設内の多湿や、朝夕の冷えこみによる植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、ハウス内の除湿、結露防止に努める。
- ・ 曇雨天が続く場合は薬液散布でなく、くん煙剤を利用した防除を行うことでハウス内の湿度上昇を防ぐ。
- ・ 株の過繁茂は多湿による発生を助長し、発病した果実や茎葉は有力な伝染源となる。下葉除去を適切に行うと同時に、伝染源となる発病箇所や不要な果梗枝は取り除き、ほ場外で処分する。
- ・ 発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## ●うどんこ病

### 予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 1.5%）。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない。

### 防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は 20℃前後であり、加温を行う施設内は本病の発生に好適な環境となりやすいため、発生予防に努める。
- ・ 多発生すると防除が困難になりやすいため、ほ場での発生状況に注意し、発生初期に速やかに防除を行う。
- ・ 株の過繁茂は発生を助長させるため、下葉除去を適切に行う。果実での発生にも注意し、不要な果梗枝や発病果は速やかに除去する。

## ●炭疽病

### 予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率は 1.1%（平年 1.0%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本病の発生を助長しない。

### 防除対策

- ・ 発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培地も含めて抜き取り、ビニール袋に入れて圃場外へ出し、殺菌処理をしてから残渣を処分する。
- ・ 厳冬期も緩やかに病徴は進展するため、新たな発病に注意する。また、開花、着果により株に負担がかかると萎凋症状が進展する可能性がある。

## ●アブラムシ類

### 予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 1.3%（平年 1.5%）と平年並であった。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ 発生に注意し初期防除に努める。すでに発生しているほ場では早急に防除する。
- ・ 天敵を利用しているほ場で薬剤散布するときは、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

## ●ハダニ類

### 予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は 9.5%（平年 13.8%）と平年よりやや少なかったが、一部で多発ほ場が見受けられた。
- ・ 1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

## 防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生のうちには防除を徹底する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的防除剤や天敵を利用する。なお、物理的防除剤は卵への効果が低く、残効性が期待できないため、5日前後の間隔で連続散布する。
- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類と天敵の発生状況をよく観察し、必要に応じて天敵の追加放飼または薬剤散布をする。薬剤散布する場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

## ●アザミウマ類

### 予報の根拠

- ・1月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.9%（平年2.7%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温はほぼ平年並のため、本種の発生を特には助長しない。

### 防除対策

- ・花での発生状況をよく観察し、寄生が認められた場合は少発生のうちには防除する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・例年多発生するほ場では、開花初期の防除を徹底する。
- ・天敵を利用しているほ場で薬剤散布するときは、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

## 【イネ】

### <その他病害虫>

## ●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

### 防除対策

- ・県内全域で分布が拡大している。未発生地域への人為的な貝の持ち込みを防ぐため、トラクター等の農業機械を使用する際は作業するほ場の順番を考慮するとともに、既発生ほ場から土が移動する危険がある場合には農業機械を洗浄するなどの対策をとる。
- ・昨年7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・本種は低温に比較的弱いですが、土中の貝は生き残るため、2月中にロータリー耕を行い、越冬貝を粉砕する。ロータリー耕は細かく、また回数が多いほど効果が高い。
- ・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。
- ・スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。



## 【コムギ】

### <その他病害虫>

#### ●うどんこ病・赤さび病

- ・昨年4月下旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は54.8%（平成5.5%）、赤さび病の平均発病株率は17.2%（平成0.2%）と平成よりもかなり多かった。
- ・本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。また、うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残渣で越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源はほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に薬剤の予防散布を行う。
- ・窒素肥料の過多を避ける。

## 【チャ】

### <その他の病害虫>

#### ●赤焼病

- ・病原菌は細菌である。本病は寒害、霜害によって発生が助長されるため、凍霜害が発生する（した）場合は注意が必要である。
- ・初発を確認したら速やかに銅を含む殺菌剤を散布し、その後発生状況をみながら追加防除する。
- ・常発ほ場で凍霜害を受けた場合には発病を待たずに速やかに薬剤散布を行うことが望ましい。特に、幼木園や、つゆひかり、おくひかりなどの品種は注意する。

#### ●チャトゲコナジラミ

- ・寄生密度の高い茶園では、一番茶時期の成虫の発生を抑制するため越冬幼虫を対象に防除を行う。
- ・幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように丁寧に散布する。
- ・マシン油乳剤を散布すると赤焼病の発生を助長するので、赤焼病の発生が心配される茶園では、マシン油乳剤を散布する1週間前までに、銅を含む殺菌剤を散布する（マシン油乳剤との混用散布は、殺菌剤の効果を著しく低下させるため行わない）。

### 3 季節予報

#### ● 1か月予報 (東海地方 令和4年1月20日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 1月22日から2月21日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。
1週目	気温	1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。
2週目	気温	2週目は、平年並の確率50%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	30	40	30
1か月	降水量	30	30	40
1か月	日照時間	40	30	30
1週目	気温	20	40	40
2週目	気温	30	50	20
3～4週目	気温	40	30	30

【予報の対象期間】

1か月	:	1月22日(土)～	2月21日(月)
1週目	:	1月22日(土)～	1月28日(金)
2週目	:	1月29日(土)～	2月4日(金)
3～4週目	:	2月5日(土)～	2月18日(金)

#### ※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL <a href="https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html">https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html</a>
--